（様式 3-2：成果報告書の要約）

平成 22 年 2 月 22 日

成果報告書の要約

助成番号	助成研究名	研究者・所属
第 428-4 号	視覚障がい者を対象とした歴史的観光地おける移動のバリアフリー化に関する研究	新田 保次 大阪大学大学院工学研究科
キーワード	歴史的観光地，視覚障がい者，行動特性，観光行動ニーズ 観光ガイド	

1. 研究目的

QOL を向上させるには，日常の外出機会だけでなく，観光や娯楽等を目的とした非日常の外出機会を増やしていく必要がある．しかし，我が国の代表的な観光地である歴史的な地区では，様々な理由によりバリアフリー化が遅れている(図１参照)．既往調査では，障がいがあるためにあきらめたり妥協したりしたことについて「旅行や遠距離の外出」の占める割合が高い結果となっており，筆者らの既往研究においては，視覚障がい者の観光行動のニーズが，顕在化していないことが確認されている．

そこで，本研究は歴史的観光地における視覚障がい者の観光行動を主対象にしくみ，かたち，こころの各方面から課題を整理し，歴史的観光地におけるバリアフリー整備の方向性について考察することを目的とした．

2. 研究手順

研究の手順は以下のとおりである。

① 歴史的観光地においてバリアフリー化が進まない構造を体系化した上で、行政計画上の歴史的観光地のバリアフリー化の位置づけを整理し，しくみの課題整理を行う。（第２，３章）

② 視覚障がい者を対象にアンケート調査を実施し，旅行・観光行動に実態を把握した上で、国際生活機能分類ＩＣＦの考えを援用し、外的要因（環境因子）と内的要因（個人因子）およびそれらに影響を与える経験（主観的体験）の視点から観光行動ニーズの構造を明らかにする。（第４，５章）

③ 岡山県倉敷市美観地区をモデルに、視覚障がい者に配慮した観光ガイドを試行し，その効果を分析する．（第６章）

①～③の結果を踏まえ、歴史的観光地のバリアフリー整備の方向性について考察する．（第７章）

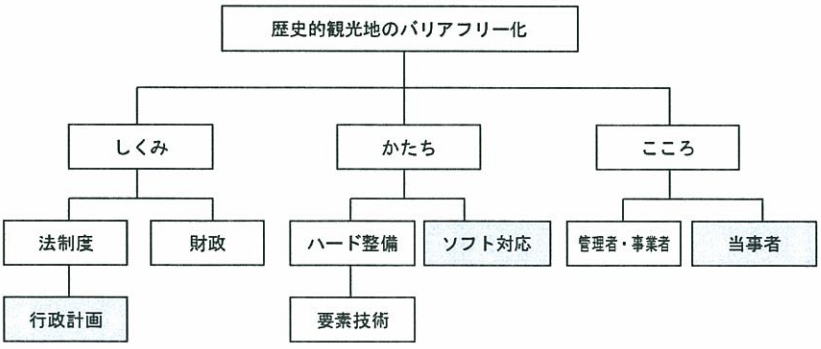

図１ 歴史的観光地のバリアフリー化への要因

3. 研究成果

(1) 行政計画上の課題《しくみ》

・移動円滑化基本構想と景観計画の策定状況と総合計画における位置づけを踏まえると，歴史的観光地は重点的な地区に位置づけられていることが多い．京都市の取り組みのように，移動円滑化と景観保全，形成の共通となるコンセプトを持って総合的に整備の考え方を示していくことが望ましい．

・同一の地区や経路が移動円滑化基本構想，景観計画の両方に位置づけられているが，相互の調整を図った整備の考え方は示されていない．景観に配慮しつつ，移動円滑化を図っていくことについて，双方の計画に明確に位置づけておく必要がある．

(2) 視覚障がい者の観光行動特性《こころ》

・本研究で行ったアンケート調査結果から、視覚障がい者は、旅行・観光行動を活発に行っているが、同行者や情報の入手、交通手段に制約があることが明らかになった。

・旅行・観光行動を行うまでの行動、意思決定を５段階に仮定し、制約を感じる理由について分析した結果、初動期の行動ニーズを認識する段階では、費用や時間、同行者の確保が阻害要因となる傾向にあるが、目的地の探索、評価の段階では情報が、観光地で行動を起こす段階では、情報と移動が阻害要因となっていることが確認された．

(3) 視覚障がい者に配慮した観光ガイドの効果分析《かたち》

倉敷市美観地区をモデルに視覚障がい者に配慮した観光ガイドを試行した．ガイドは，モデル地区の街並みを楽しめるコース(約 1.3km)を設定し，コース上に７か所のポイントを計画した．各ポイントでは，「手で触れたり」，「話を聞いたり」，「立体コピーを用いたり」することで，当該地区の魅力を視覚以外で体感できる工夫を行った(写真１参照)．

写真１　ガイドの様子

ガイドの効果を検証するため，ガイドの実施前後においてアンケート調査を行った．「地区の印象」，「地区の散策行動意図」，「他者への推薦意図」については，「とてもそう思う」から「全く思わない」の７段階評価尺度で回答を得た．また，まちなみの印象については，個人がまちなみ抱く印象を相反する形容詞の対を用いて，それぞれの形容詞の対に尺度を持たせ，その度合によって，印象の変化をとらえることにした．

その結果，地区の印象およびまちなみの印象をあらわすすべての形容詞について，プラスのイメージに変化する傾向が確認された(図２参照)．散策行動意図と他者への推薦意図の変化は，ガイド実施前後における平均値の比較を行った．その結果，他者への推薦意図は有意水準1%で増加が確認されたが，散策行動意図は有意な変化は確認できなかった(図 3 参照)．

以上の結果より，視覚障がいに配慮した観光ガイドは，地区の認知の向上には寄与するが，行動意図の向上には寄与しないと考えられる．このことは，ソフト支援だけでは視覚障がい者の観光行動の顕在化は難しいことを示していると推測される．

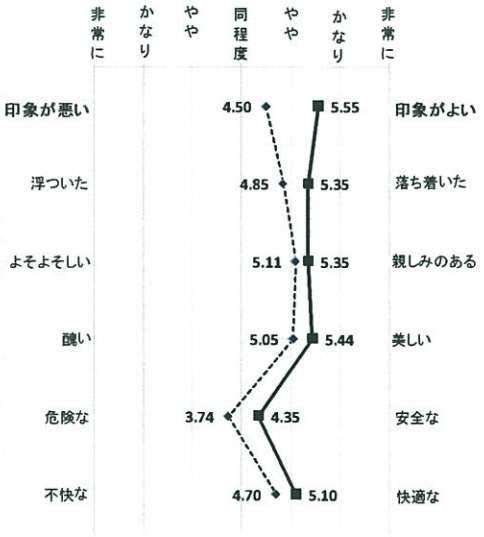

図２　印象の変化

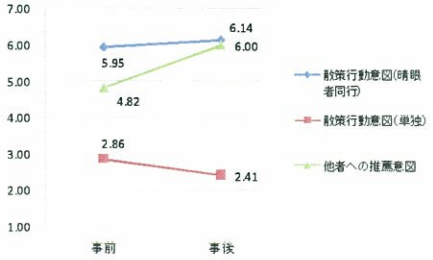

図３　行動意図の変化